
先生のコーヒー

あや/小町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生のコーヒー

【Nコード】

N1995I

【作者名】

あや／小町

【あらすじ】

『聖葉女子学園』シリーズ2本目。

父を亡くし、天涯孤独の身になって山中にある全寮制の学校、聖葉女子学園に転校して来た尾崎晶。

明るくて人懐こい彼女が敢えてこの学校を自ら選んでやってきたのは、亡き母のことを知るためだった。

当時のことを晶に話してやりながら、舎監の紀佐先生は思い出す。放浪の画家であった晶の父、竜世りゅうせいの若き日のことを。

『大変なことだから諦めるのが当たり前ってニュアンスで質問される事が、俺にはわからないんだけど』

尾崎晶が転校して来てすぐの話。

1頁

「なにをしているんですか、尾崎さん」

「ふぎやあつ」

夜の資料室でいきなり声をかけられて尾崎晶は飛び上がった。

聖葉ではみんな寝静まっているはずの深夜一時。

もちろん消灯時間はとうに過ぎている。

「あ、あ、明かりをつけずに見回りするの、やめていただけませんか先生！」

なにかを隠すように左手を握り締めて後ずさりする晶に、舎監の紀佐珠子は動じることなくもう一度聞いた。

「なにをしているんですか、尾崎さん」

晶は携帯のライトをつけて棚のファイルを漁っていた最中だったし、そもそも資料室に入り込んでいる時点でどのような言い訳もできない。

紀佐は晶の固く握りこんだ手をじっと見つめながら言った。

「手の中のものを出しなさい、尾崎さん」

「できません」

晶は逃げ場を探すように落ち着きなくあたりを見回しながら言ったが、紀佐は追求をやめなかった。

「手の中にあるのは、ここの鍵ですね。どうやって手に入れたのか知りませんが没収します。お出しなさい」

「すみません先生。それはできません。……じゃなかった、鍵なんて持ってません。ここの扉はたまたま開いてて、えっとあたしは寝ぼけてまして」

おそろしく見え透いた言い訳に、紀佐は浅くため息をついて晶のほ

うへ踏み出した。

と、晶が窓に手をかけてロックをはずす。

「な……」

紀佐が言うより先に晶は大きく窓を開け、勢いをつけて窓のさんに飛び乗った。

その真剣な目つきは脅しやポーズではない。本当にそこから飛び降りるつもりで晶は地面までの距離をはかり、ためらいなく窓枠から手をはなそうとした。それを見て取って紀佐はあわてて言う。

「お待ちなさい！」

焦ったような厳しい声に晶の背中が止まる。

紀佐はショールをかきあわせる手に力をこめた。ここは二階だ。落ちたらただではすまなからう。

内心の動揺を隠して紀佐は静かな声で続けた。

「……そこまですることないでしょうに。もうわかりましたからお戻りなさい」

そうですか？と晶はきょとんと首をかしげ、素直に窓から降りてきた。

「……では、おことばに甘えて」

「何階だと思っているんですか。ほんとに無茶をするにも程がありますよ」

「え、何階って、二階でしょう？」

だが晶は落ち着いた動作で窓を閉めながら、なんでもないことのようと言う。

「木にでも飛び移るつもりだったんですか。落ちたらどうします」

「どうもないです。これくらいの高さなら」

全然平気、と晶は真顔で親指を立てて見せた。

やんちゃなこと、と紀佐は内心で肩をすくめた。やんちゃな娘は決して嫌いではない。

だが勤続45年の面子にかけてもそんなことは表に出さず、冷静に

毛糸のショールを羽織りなおした。

5月とはいえ、聖葉は北国の更に山の中に建っている。

夜ともなれば、見回りにショールが必要なくらい冷え込むのだった。

紀佐は話をもとへ戻す。

「その鍵は、どこで？」

「言えません」

晶は即答してしまってからあわてて言い直した。

「鍵なんて持ってませんたら」

そんな言い訳はまるで無視して紀佐は続ける。

「その鍵は誰から手に入れました？」

「言えません。あーまた……」

またしても口を滑らせてしまってから片手で目を覆う晶を見て、紀佐は思った。

ああ、基本的に、嘘をつくという回路がないのだ、この子は。

よくこんな無防備で今までやってこれたこと。

そんな晶を紀佐はますます好もしく思ったが、好悪の情と規則違反はまったく別のものだ。それはそれ、これはこれ。

ややしばらく追求したが頑として口を開かない晶に、紀佐はため息をついた。

「資料室の鍵は、桐生さんは決して高橋さんの手には渡さないでしょうに。高橋さんの友人であるあなたがよく手に入れましたね」

それを聞いて晶は目を丸くした。

「先生。よくご存知ですね」

学園内の鍵のスペアをいくつ所有するかで寮内の地位を競う『鍵バトル』。

これは何年かに一度、誰が言い出すともなく行われるゲームだが、

今は高橋妃穂と桐生園子がほぼ同数でトップに君臨している。

それはあくまで生徒たちの間だけで秘密裏に行われるゲームだと晶は聞いていたので、紀佐がバトルについて知っているだけでなく、その内情まで知っていることに驚いた顔をしたが紀佐は淡々と答えた。

「わたくしはOBですからね。鍵バトルは、大昔からあったゲームですし」

「なるほどお」

「ところで、一体なにを調べていたんですか」

「死んだ母のことです」

口ごもる様子も見せずに、晶はまっすぐ答える。

鍵を手に入れた経緯については話さないが、自分個人の事情については隠さないのだな、訊ねれば答えるのだなと紀佐は思った。

「お母様のことを、なぜ」

「母は聖葉の生徒だったらしいですよ。はじめは図書館で卒業アルバムを見たんですけど、それらしいのがどこを探してもなくて、でもここならなにかあるでしょ。入学時の書類とか」

それはあるだろうが、と紀佐は不審な顔をした。

なぜそこまでして実母のことを調べたいのか、紀佐にはわからない。資料室に忍び込むような大仰な真似をしなくても、まわりの大人、親戚に聞けばすむことではないか。そう思っていると、晶が続けた。「父と母は駆け落ちして一緒になったそうです。父は母の実家に入り禁止状態で、近づくこともできなかったようだし、自分の方の実家からも勘当同然だったので、あたしはどちら側の親戚にも会ったことがないんですよ。一度も」

もちろん連絡先も知らないし、どこに住んでいるのか、どんな人たちなのかもわからないのと言って晶はちよっと笑った。

「でもね。父は確かにどちらの家とも没交渉だったかもしれないけど、なんと言っても自分は孫だし、父も今はもう死んでいないし、会ってもいいんじゃないかと思って」

さばさばした口調と言っている内容とのギャップに、紀佐はとっさになんと返してよいか言葉に詰まった。

紀佐は学生時代も含めれば50年以上聖葉にいる。

ここは何かしらわけありの子女が入る学校であるから、それだけの長さここにいれば世の中で起き得る大抵のことは見聞きする。だが、多少のことでは驚かないはずの紀佐が驚いたのは、晶の歪みのない明るさだった。

「そんなに、なにも知らなかったのですか」

言葉を選びながら言った紀佐に、晶は憤慨する口調で言った。

「だってうちの父、写真もないんですよっ、母の！」

あの子は……。

と紀佐は思わず声に出してつぶやいてしまいそうになって、寸前で思いとどまった。かわりに深いため息をつく。

「探しても探しても探しても一枚もなくて。だから母の写真がどうしても欲しくて。あと実家の住所ですね。そのためにあたし、ここに入学したんです」

母のいた学校で母と同じように生活してみたかった、っていうのもありましたけどね、と言って晶はひとつ大きなくしゃみをした。

「舎監室にいらっしやい、尾崎さん」

「ほえ」

「そのままでは風邪をひきます。コーヒーを入れてあげますから、一緒にいらっしやい」

はじめて入る舎監室は思ったより小さな部屋だったが、こざっぱり

としていて温かった。

出された座布団の上にちょこんと正座して晶は部屋を見回す。ベッドがあつてその隣には小さな本棚がある。何度も繰り返し読んでいるのだろう、本はどれも大切に扱われている気配があり、感じよく古びていた。

「お砂糖とミルクは入れますか」

そうこうしているうちにキッチンでは湯が沸いて、コーヒーのいい香りがしはじめたので晶は答えた。

「あ、いえ。ブラックで」

紀佐は一回分の粉をはかると、残りをすぐに冷凍庫にしまいなおした。

晶は壁にかかっている時計を見上げる。深夜一時半。

思っていたよりずいぶん手間取ってしまった。先に寝ていてと言ったものの、妃穂と茨木は多分起きて待っているだろう。

心配しているだろうか、と晶が思ったときに紀佐がコーヒーを運んできた。

「どうも。いただきます」

その香りにつられて早速口をつけた晶が、ひとくち飲むなり言う。

「なんですかこれ、うまいっ!」

「そうですか。それはよかったですね」

紀佐は自分の分も小さめのカップ＆ソーサーに入れて持ってくると、小振りのテーブルを挟んで晶の正面に座った。

「なんつーか、濃いのに喉にするっと通りますね!」

「それは、雑味がないと表現するのです」

へえ、と晶は感心したようにうなずいた。

「先生なんかこれ、お菓子が欲しくなります」

クッキーとかクッキーとかクッキーとか。あ、ケーキでも喜んでいただきますがと言う晶に、紀佐は呆れて目を細めた。

「図々しいですよ、尾崎さん」

「だってすごく美味しいですもん。単品で飲むのがもったいなくて屈託なく笑う晶を見て、紀佐はゆっくり立ち上がりながらつぶやいた。

「血筋でしょうか」

「は？」

晶が聞き返したのには答えず、紀佐は戸棚を開いて中からバタークッキーの缶を取り出した。それを小皿に出してくれながら、紀佐は言う。

「あなたのお父様は、画家の尾崎竜世氏でしょう？」

それについては入学一ヶ月で既に学内では有名な話だったので、晶はさして不思議にも思わず答えた。

「はい、そうです」

「ということは、おかあさまのお名前は、志帆かしらね」

「……はい」

晶はやはりうなずいたが、今度はいぶかしむようだった。

「旧姓は、三沢志帆？」

「そこまでは知りません」

晶は首を横に振る。

ただ名前は確かに志帆です。父が寝言で名前呼んでましたから。そう言う晶に紀佐はまたしても深いため息をついた。

尾崎竜世。口が堅いにもほどがある。

娘なのだから、それくらい普通に教えてやったらいいのに。

「そこまで何ひとつ知らなかったのですね……旧姓三沢志帆。多分、それで間違いないと思いますよ」

そこでやっと晶は膝を叩いた。

「あ、そうか！ 先生ここ長くていらっしやるから！ 母がいた当時のこと、もしかしてご存知なんですね！」

「そうですよ。三沢さんがここにいた時、わたくしは既に舎監としてここにいましたからね」

「うわあっ、そっか」

晶は両手で勢いよく膝を叩いたり、その手で口元を覆ったりして嬉しそうに興奮していたが、そのうちテーブルをぐるりと迂回して紀佐の隣に移動してくるや、感極まった様子で紀佐にひしと抱きついた。

「嬉しい、ここに生き神様がっ」

「……」

沈黙が落ちた。

あれ不穏な気配がするなあ、と思って晶は抱きついたまま紀佐の顔を見上げて言い直す。

「えっと、えー、生き字引き？」

かな、と首を傾げた晶だったが、沈黙は続く。

紀佐は表情を大きくは変えないが、微妙に機嫌を損ねているようなのは晶にもわかった。

あっそっか、とめどもなく年をとってる風の言い回しが気に入らなかったのかなと晶は思っ、少々ご機嫌をとってみることにする。

「えっと、失礼しました訂正します。女神様？」

「女王様でしょうそれを言うなら」

間髪入れずに言い返されて、晶は肩をすくめた。

「か……かしこまりました女王陛下」

ひよっとして笑うところなのかと思わないでもなかったのだが、紀佐があんまり真顔のままなので冗談なのか本気なのか区別がつかなかった。

でも『寮母さん』というより、『女王陛下』の方が確かに先生にはぴったりかもと晶が考えた時、呆れたように紀佐が言った。

「気軽にスキンシップとるところも、あなたたち親子はほんとにそっくりです」

三沢志帆が聖葉に入ってきたのは秋の終わり、ひどく中途半端な時期だった。

単に娘をお嬢様学校へ入れたいだけならば、わざわざこんな山奥の寮に入る以外に通う方法もないような学校に入れなくても他にもっと交通の便のいいところがいくらでもある。だから季節外れの転校生でなかったとしても、志帆が聖葉に来たというだけで『わけありなのだ』と想像はつく。

志帆は物静かな生徒だった。

体も弱く、だからというわけではないが割と一人でいることが多いように紀佐からは見えた。

あまり自分から活発に意見を言う方ではないが、かといって頼りなくふわふわしている印象はない。ただ口や態度に出さずにいるだけで、ひとつのことを強く胸に抱いてあたためているように見えた。

志帆と竜世とが出会ったのは、志帆が前に通っていた学校の学園祭でだった。

そこは全寮制でこそなかったが、他は聖葉と同じように持ち上がり式の女子校で、やはりお嬢様学校だった。

そこで竜世は仲間何人かと、こともあろうに『学園祭ゲリラ』を実行した。

友達の恋を応援するためという名目ではあったものの、なんのかの言って本人も相当楽しんでいたことは間違いない。

もちろん、招待券を入手するという正攻法ではなく、体力と度胸にものを言わせて塀を乗り越えるという荒っぽいやり方だったので竜

世たちはたちまち見つかって追われることになったのだが。

竜世はそこで志帆と出会い、ひどく体が弱いくせに強い意思を持つ志帆に恋をした。

志帆のほうも同じだったのだろう。その後すぐに二人は付き合いはじめたのだが、これには志帆の両親が大反対だった。

もちろん外で会うことは許さなかったのだが、そこは竜世のこと。三沢家の外壁をよじ登って窓から顔をのぞかせては、志帆を喜ばせた。

そんなことをしているうちにそれがばれて、志帆は聖葉に入れられることになる。

ていのいい、虫よけ措置だった。

とそこまで紀佐が話したところで、晶が片手をあげて話を中断させた。

「どうしてそんなに詳しいんです」

「あなたのお父さまから直接聞いたからです」

えええっ、と晶は座布団の上に座り直して身を乗り出した。

「先生、父に会ったことあるんですか！」

「ありますよ」

「なんで、どうして……あっ、学園祭の一般公開とかですか？」

紀佐は目を細め、当時のことを思い出すように宙を見上げた。

「三沢志帆さんがここへ来たのは秋の終わりのことでした。三沢さんは確か、次の年の学園祭を待たずにここを去ったはずですよ」

紀佐の言葉に、晶はひとつ納得した。なるほど、だから卒業アルバムをいくら探しても見つからなかったのか。

「大体あの子が、大人しく招かれるのを待ってるようなタマですか」

「は……我が父のことながら、ごもつともです」

お言葉遣いはともかくとして言っていることは正しかったので、晶は神妙に同意を示したが、同時にこうも思った。

一体、なにをしたのだ、父。

紀佐先生に『タマ』だの『あの子』だの言われるような、なにを。

「今あなたが座っている、ちょうど同じところにあの子も座りました」

言われて晶は花柄の座布団を見下ろした。

ここに、父も。

ドンドン、ドンドン。

舎監室の窓が外からいくぶん乱暴に叩かれて、紀佐はびくつと読んでいた本から顔をあげた。

今日か明日には初雪が降ろうかという寒い夜のことだった。

「先生ええ、あけてええ」

紀佐は眉をひそめた。窓の外で聞こえた声は、尾崎竜世のものではないか。

聞き間違いかと耳を澄ませたが、重ねて呼んでいるのはやはり竜世だった。

「ここ、あけてくれええ」

確かに竜世の声だ。

なにごとだ、一体。そう思って紀佐は立ち上がり、カーテンを開けた。

志帆が入寮してからひと月足らずの間に、竜世は三度、紀佐に見つかってつまみ出されている。そのおかげで彼の存在はこの女の園でたいそう知れ渡り、今となっては彼を知らぬものがないほどの有名な人となっていた。

「先生こんばんは」

窓をあけると案の定、竜世の日に焼けた笑顔があった。

おどけて片手を顔の横まであげて挨拶しているが、その笑顔は寒さにこわばっている。

ふと見ると、彼の背後の闇に白いものがちらついていた。

初雪だ。降ってきたのだ。

竜世は、傷だらけの革ジャンにジーンズという軽装である。今日も寮の外壁を登る気満々だったらしく、手には黄色いゴム粒付きの軍手をはめているが防寒の役には立たなかったらしい。彼はその場で落ち着きなく足踏みして、歯を小さく鳴らしていた。

「助けて、先生。死ぬ」

紀佐がなにか言うより早く、竜世は窓の棧に両手をかけて、勢いよく室内へ転がり込んできた。

「うお助かった、先生サンキュ」

挨拶のつもりか、紀佐の手をとってその甲に素早くちゅっと音を立てて口づける。紀佐はキスよりも、竜世の唇の冷たさの方にぎよつとした。

彼が徒歩で山をのぼって来ているらしい、というのは過去三回で知っていた。

ふもとからの距離をもともせず、毎度毎度のぼって会いに来る姿はロミオとジュリエットのように、寮の女生徒たちにはおおむね好評である。だが、彼女たちよりも大分年を重ねた紀佐には、素敵だロマンチックだと単純には思えなかった。

見つければ、未成年だから警察とまではいわないが家庭に連絡されるのをわかっているが、なぜこんな大変な思いをしてまでのぼっ

てくるのか聞いてみたかった。

「あったけー」

竜世は律儀に履いていた靴を脱いで、泥が落ちないようにそつと、紀佐が差し出した古新聞の上に置いた。そして花柄の座布団の上に自分からにじり寄っていつてあぐらをかくと、やっどほつとしたように軍手を脱いで両手をこすり合わせる。

「コーヒーを入れますけど、飲みますか」

「ご馳走になりまーす。いやあ寒かった。いきなり降ってくんだもん」

「山の上ですからね。街より二度は気温低いですよ」

紀佐がお湯を沸かすために立ち上がりながら言うと、竜世はなるほどねえとうなずいた。

「ひとつ利口になった。だめな、俺もまだまだ考えが甘いわ」

そうですね、と相槌をうちかけて、紀佐はあわてて思いとどまった。侵入を後押しするようなことを言っただうするのだ。

「いや今日はほんと参ったね。志帆に会うより先に凍死するかと思つたよ。さすがに今日は壁のぼりやったら落ちて死ぬわ」

「ひとつ、聞いてもいいですか」

「はいはいどうぞ」

悪びれずに返す竜世に、紀佐は訊ねてみた。

「ここまで来るの、大変でしょう」

「大変だよ？」

「それなのに、なぜ来るんです。そんな思いまでして。見つければ追い返されることもわかっていながら」

うーん、と竜世は首をかしげた。

紀佐が粉にゆっくりお湯を落しながら、横目で竜世の様子を観察している、と、ややして竜世は言った。

「大変なことだからあきらめるのが当たり前、ってニュアンスで質問されることが、俺にはわからないんだけど」

紀佐が大きく首をまわして竜世を振り返ると、彼は少し考え考え、

だがしつかりした口調で続けた。

「他に方法があるならそうするけど、そうしないと会えないから、必要なことをしてるだけ。あ、どーも」

紀佐からコーヒーを受け取って、一口飲むなり竜世は両目をきゅつとつぶって身をよじった。

「染み渡るー」

そしてそれをあっという間に飲み干してしまってから、

「おかわり」

とソーサーごと出して寄こしたから、紀佐は呆れた。

「ずうずうしい」

「だってうまいすもん。あっあっその粉捨てないで」

「薄くなりますよ」

「いいからそのままでもう一杯入れてっ」

言う通り二杯目を入れてやると、竜世は今度はさっきよりもゆっくりと一口すすった。

それからふと、付け加えるように言う。

「人がつくった梓は、人が壊せるもんだよ、先生」

「……」

紀佐は黙って自分の分のコーヒーをすすった。

なにか言ったら、竜世に同調してしまいそうで、言えなかった。

紀佐もこの学校のOBで、ご多分に漏れずわけありの生徒だったから、しがらみでがんじがらめになっていた部分はやはりあった。それを自分なりに切り開いて、今、聖葉の舎監としてここに居るつもりでいるから、竜世の言ったことはよく理解できた。むしろ、それはそのまま、自分の気持ちだったと言ってもいい。

だが強く共感できたとしても、自分の立場はあくまで舎監、それを口にするわけにはいかない。

竜世は二杯目のコーヒーを大きく飲み干すと、言った。

「ごっそさん。そんじゃ俺帰るわ」

「は？」

思わず紀佐は聞き返してしまった。そんなに苦労してここまで来たのに志帆に会わずに帰るというのだろうか。それを言うと、竜世は靴に伸ばした手を止めて意外そうに聞き返した。

「会ってっていいの？」

「もちろんだめです」

「だよね。わかってますよ。助けを求めた以上そこはけじめでしょう。先生に迷惑かかることはしない。また来るから、今日はいいわ。次はもっと重装備して来ますよ」

「来ちゃいけません」

「あ、そうね。そうだった。そんじゃ先生お邪魔しました。また」

「またなどありません」

今度は幾分強く言ったが、竜世は陽気に手を振ってもときた窓から去って行った。

志帆に会わずに帰ると言った言葉通り、ざくざくと、湿った落ち葉を踏みしめて。

まっすぐにふもとへ。

「ですから、ここでコーヒーをご馳走したのは、あなたで親子二代目です」

「うそーっ」

紀佐が言うのを聞いて晶はのけぞった。が、またすぐテーブルに肘をついて前のめりになる。

「じゃあひょっとして、父が母のことここから略奪する時に、先生

協力したり……」

「まさか」

紀佐はぼっさり切り捨てるように否定した。

「そんなことするはずないでしょう。わたくしは舎監ですよ」

「……ですよね」

晶はそれで納得したようだったが、紀佐は別のことを考えていた。

もし竜世が相談していたら、自分は手助けしていたかもしれない。紀佐は自らのしがらみに悩み、その中でもがいた経験があったから、そうした粹をぶち壊そうとする人間が好きだった。好ましいと思うし、応援したくもなる。だが。

「あの子は、わたくしに協力を頼んだりはしませんでしたよ」

「じゃあ、どうやってここから母を連れ出したんですか」

「尾崎さん、コーヒ―は美味しかったですか？」

「え、あ、はい」

突然話を変えられて戸惑う晶に、紀佐はにっこり微笑んで見せた。

「それでは、お部屋にお戻りなさい」

「ええーっ」

晶は不満そうに言ったが、紀佐にじろりとにらまれて引き下がった。

「……ごちそうさまでした」

結局、晶が自室へ戻ってきたのは深夜二時を少し過ぎたころだったのだが、妃穂と茨木はやはり起きて待っていた。

そして話を聞くと、晶が意外に思うほどの勢いで身を乗り出してきた。

「先生のコーヒーをご馳走になったですって？」

「それは凄い。なかなかないことなんですよ」

そうなの？としまいち実感のわいていない晶のそばで、妃穂が驚いた顔のままうなずいた。

「紀佐先生のコーヒーなんて、わたくしも頂いたことないわ。美味しかった？」

「とっても。そんな滅多にないことなら、もっと味わってちびちび飲んできたらよかったかな。図々しくクッキーまで出してもらったけど」

晶の台詞に、妃穂と茨木は顔を見合わせた。

滅多にないどころの話ではない。それはよっぽど気に入られたのだ。と言うか、晶のどこかに先生の胸を打つものがあつたのだ。

紀佐先生のコーヒーは、生徒たちの間ではほとんど伝説のように語られている。

彼女は長年聖葉で舎監をつとめているだけあって、どんな生徒に大しても公平に厳格だ。だが時折この老先生の胸を打つ生徒がいると、彼女は手づからコーヒーを入れてご馳走してくれる。自分の部屋でそして昔話をしてくれたり、逆に話を聞いてくれたり、相談に乗ってくれたりする。そのコーヒーを飲んでいる間だけ。

「それじゃ、先生に見つかったことでかえって予想外の大収穫だったじゃありませんか」

妃穂が言うと、晶は嬉しそうにうなずいた。

「そうなの。今すぐではないけど、そのうち母の写真と実家の住所も探しておいてくださるって言ってた」

二人はまた、顔を見合わせた。これまた凄い特別待遇だ。

「じゃあ、晶、あなたこれから出て行くの？」

妃穂が聞くと、パジャマに着替えて寝る準備をしていた晶が手を止めて返した。

「んん？」

「だって、早くも目的達成でしょう」

あそっか、と晶は納得した。そうだよねえと言いながら鏡と向き合って髪にブラシをあてる。

「どうすっかな、やっぱり出て行くべきかなあ」

「晶」

妃穂はあわてて言い添えた。

「そういう意味で言ったのではないのよわたくし。出て行ってしまふのかしらって、そうなら寂しいわってつもりで言ったのよ」

晶がブラシをかける手を止めて肩越しに振り向く。

「迷惑じゃない？」

「迷惑じゃないわよ。そんなわけないでしょ。晶、あなたこそ、ここ嫌い？」

「嫌いじゃない」

「本当？ 無理してない？ わたくしはもう初等部からここですから当たり前になっっているけど、あなたみたいに外から来た人には窮屈じゃない？ 退屈じゃない？」

晶は白い歯を見せて目を細めた。

「窮屈じゃないし退屈でもない。聖葉って確かに閉ざされたイメージがあっただけど、中に入ってみるとあたしが想像してたのよりもずっとやさしくて、あったかくて、美しくて、おもしろいよ。居心地もいいしね」

「そう」

自分の古巣を褒められて、妃穂はほっとしたように微笑した。

「だったらこのままずっとここにいたらいいわ」

「……」

晶はブラシを片手に持ったまま、肩越しにじっと妃穂を見つめる。

瞬きもせずに。

妃穂は続けた。

「外の世界でなければできないことがあるなら別だけど。特にないならここにいらっしやいよ。一緒に卒業しましょう」

「妃穂」

晶はブラシを置いて、完全に妃穂の方を向いた。

そして思いがけないことを言われたというように目を丸くしていたが、やがてゆっくりその目を細めた。

「ありがとう」

次の日の朝。

紀佐の姿を見つけるなり嬉しそうに駆け寄っていった、

「おっはようございまーす、女王陛下！」

と挨拶する晶がいた。

なんだなんだと注目する生徒たちを無視して、紀佐はすいと手を伸ばして晶の頬をつねりあげる。

いででで、と首をすくめて晶は言い直す。

「て、訂正します。おはようございます紀佐先生」

「よろしい」

冷ややかにそう言って紀佐は晶の頬から手を離し、まるで何事もなかったかのようにその場を去っていった。

「おはよう、尾崎さん」

その紀佐と入れ替わりに晶のすぐそばに立ったものがある。

「よく眠れた？」

黒髪の、日本人形のような細面の美貌の少女は、晶や妃穂と同じく高等部一年生の桐生園子だ。

「桐生さん」

晶はぱっと顔を輝かせて人懐こい笑顔を浮かべたが、少し離れたところでそれを見ていた妃穂はくると背を向けて校舎のほうへ歩き出した。

二人は校内で顔を合わせても互いに挨拶もしない。どうしようもなく犬猿の仲なのだ。

茨木も同様に歩いていくのを目の隅で追いつつも、晶は制服のポケットから小さなものを取り出してそっと園子に渡した。

「これ、ありがと」

園子も人目に付かないように、受け取ったそれをすぐに自分のポケットにしまう。

「お役に立てて？」

「うん、とっても。感謝してる。時にあれは考え付いた？」 『あたしが桐生さんの役に立てること』」

考えついたわ、と園子は妖艶に笑うと、心持ち声を落として晶の耳にだけ届くように告げた。

「いつか、ひとつだけ、無条件で園子の言うことを聞くこと」

「怖いなー」

ちよっと真顔になって身を引く晶に、園子は大きな黒目がちの瞳を伏せてくすくす笑った。

「よろしいわね。約束よ」

晶は手をあげて額の生え際をぼりぼり搔くと、

「いや、異存はないんですけどね……桐生さんさ」

「なあに」

楽しそうな笑みのままで返事した園子の頭の上に、ぱんと自分の手を置いた。

「あんたね。基本的に、それ間違ってるから」

園子の笑みが固まった。

「と、言う」と

笑顔はそのまま、目だけに鋭い光を灯して園子は晶を見返したが、晶は少しも気圧されることなく続けた。

「何かして欲しいことがあれば、普通に頼めばいいじゃない」

園子は晶を見上げたまま、ゆっくり瞬きした。

作っておいた笑顔が次第に崩れ、呆れたような驚いたような無防備な表情になる。

「ね？ そんな、交換条件つけたりしなくても、できることならいつでも何回でも、するよ。なんでも言ってる？」

園子のつやつやした髪を手の平で整えるようになでつけると、晶は、それじゃねと言って手を離れた。

「ちょー待ってよ妃穂ー」。

言いながら渡り廊下を走っていく晶の背中を、園子はずっと、見えなくなるまで追っていた。

「妃穂、妃穂っ」

晶は追いつきながら声をかけるが、妃穂は振り向かなかった。歩みも止めないで晶は横に並ぶ。

「待ってたら」

歩きながら妃穂は返す。つんと斜めを向いたままで。

「ごめん遊ばせ、聞こえなくって」

よく言うよと晶は肩をすくめ、気にせず一緒に歩く。

かわいい意地悪だね、と晶がつぶやいたのが気に食わなかったとみえ、妃穂はぴくりと片眉をあげて皮肉を言った。

「どなたからもモテモテでよろしいですこと」

「あつ何その言い方」

晶は片手を妃穂の腕に絡めると、もう片方の手で制服のポケットを探った。探りながら言う。

「まあご機嫌直して」

「わたくし、ご機嫌悪くありませんよ」

甘い感じのする笑顔を作っけ言う妃穂を、晶は絡ませた肘でちよつと押した。

「そのどこがさ」

そしてポケットから飴を取り出して器用に指先で包装を破くと、

「妃穂、あー」

「あー？」

思わずつられて開けてしまった妃穂の口の中に、その飴を放り込んだ。妃穂は目をぱちくりさせて尋ねる。

「……なんです、これ」

「飴」

「だから、どうして飴なんです」

「ポケット入ってた」

茨木もびっくりしたように見つめる横で、晶は自分から腕をほどいて先へと歩いていく。

またえらくストレートな懐柔というかお茶の濁し方だこと、と妃穂はその弾む背中を見ながら思った。

自由奔放に振る舞う晶。

だが、妃穂にとってそれは不快ではない。

「茨木」

「なんですか」

「外の世界って、晶みたいな人がたくさんいるのかしら」

茨木は少し考えてから、ごく控えめな言い方をした。

「さあ……それはどうですか」

「だとしたら、外の世界も悪くないわね」

自分もいつかはここを出て行かなくてはならない。だが、外には晶みたいな人もいるのだと考えると、怖さがやわらぐ。そう言うとき木は、そうですねと笑ってから続けた。

「でも、まだ三年ありますから。卒業はもっと先の話ですよ」
あともう少しの間はこのままいられますよと、珍しく甘やかすようなこと言う木は、妃穂も微笑んだ。

そうですね。

ほんとに、そうですね。

3頁（後書き）

晶の父、竜世は放浪の画家でした。

本人は国を選び好みすることはなかったのですが、顧客はイタリアに多かったようで竜世本人もそこが性に合っていたようです。

妃穂「やっぱり芸術の本場だからかしら（うっとり）」

晶「んーん、ラテン気質と女好きだから（きっぱり）」

というわけで晶もイタリアに滞在していた時期が長かったようです。当然幼なじみもいたりします。

竜世が死に、日本へ、聖葉へ行くことを決めた晶をもっとも気遣ったのは、イタリアの幼なじみクラウディオ。

次は「学園祭ワルツ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1995i/>

先生のコーヒー

2010年10月9日01時48分発行